新図書館等複合施設の活用をみんなで考えるワークショップ（全５回）

＜第４回＞「まちの賑わい」実施記録

1 開催日時：2024 年 12 月 8 日（日） 10：00～12：00

2 開催場所：妙高市役所１階 コラボホール

3 参加者：30 名

4 スケジュール

時間	内容
14：00 ～ 14：35	アドバイザーのレクチャー 「図書館のチカラ：私の町の自慢の図書館」
14：35 ～ 16：00	グループワーク ①ワークショップの進め方 ②グループディスカッション ③グループ発表・アドバイザーコメント

5 ワークショップの内容

（1）アドバイザーのレクチャー「図書館のチカラ：私の町の自慢の図書館」

（株式会社オガール 代表取締役 岡崎正信氏）

→資料①参照

・岩手県紫波町の概要や、紫波町における民間主導行政支援のまちづくり・公共事業の手法、図書館を集客装置と位置づける考え方、紫波町の図書館の方向性、オガールプラザの活動、取組みの成果などの紹介

・図書館にはコストがかかる。逆転の発想で図書館を集客装置に見立てられないかと考えた。人が集まればギャラリー、ショップなど付帯サービスが発生し、訪問者が増えエリアに活気が生まれる。そこに住みたい、行きたい人が増えて不動産価格が上昇し、固定資産税と住民税が増加する。結果、福祉・教育などで住民に再配分が可能になる。

・「別に目的がなくとも、そこにいることを許す紫波町図書館」、これが紫波町図書館の本質である。「地域課題を解決する図書館＆市民の課題を見つけてあげる図書館」、課題のうち一つでも解決できるような図書館をつくるべき。こういったことを官民ともに探っていく。

・オガールプラザでは、ファーマーズマーケットをやったり、居酒屋をつくったりもしている。大騒ぎしてもよく、スタジオを高校生が利用。病院や学習塾、カフェもある。広場でのビールフェスでは、大人が楽しみ、子どもは暇そうにしていたが、司書が図書館から出てきて読み聞かせをした。紫波町の司書は敷地にとどまらない。

・2012 年に図書館をオープンし、紫波町の地価は 13 年連続上昇している。子どもは増え保育園の数が足りない状況。移住者へのアンケートでは、紫波町を選んだ一番の理由は「図書館があるから」。

・公共施設（図書館）からまちづくりを考えるとき、未来の市民への約束が不可欠。不動産の価値は施設敷地ではなくエリアにつく。優れた公共施設の周辺エリアの不動産は人気が出て価格は上昇し、税収も上

がり、図書館経営に安定が生まれる。

（2）グループワーク

●グループワークの進め方等について説明（ファシリテーター）

→資料②参照

・ファシリテーター（図書館パートナーズ 小田垣宏和氏）がグループワークの進行を担当

・グループディスカッションの進め方について説明（5 つのグループに分かれて意見交換しながら「マンダラート」（9×9 の 81 個のマスがあり、中央のマスから外側に向けて思考を展開）に記入し発表）

●グループディスカッション・グループ発表

→5 つのテーマのグループに分かれ、次の①～④の手順で意見交換しながら、出た意見に基づき「マンダラート」に記入のうえグループ発表

①グループを選び、まずはグループ内で自己紹介（「前半の感想、気づき」「妙高市でオススメのお店やスポット」「来年、新たにやりたいこと」）

②各グループ 1 枚の「マンダラート」の真ん中に記入されているグループテーマの周りに、8 つのサブテーマ（関連するキーワード）を検討し記入

③サブテーマごとに、それぞれのテーマに関わる詳細なキーワード（具体的な行動、必要なモノ・コト）を検討し記入（可能なら、類似するキーワードの色分けをしてグルーピングし、優先順位をつける）

④記入した「マンダラート」にもとづき発表、最後にアドバイザーよりコメント

【グループのテーマ】

A グループ：新施設と仕事や商売をつなぐしかけをつくろう（新施設と商店街の間の関係づくり）

B グループ：ワクワクを体験でき人びとが回遊するまちをつくろう（地域にある資源を活用し地域の魅力を高める。新施設をその契機に）

C グループ：多世代がつながるまちをつくろう（シニア世代の健康づくりや子育て支援、子どもの育成を通じて多世代が交流するしかけづくり）

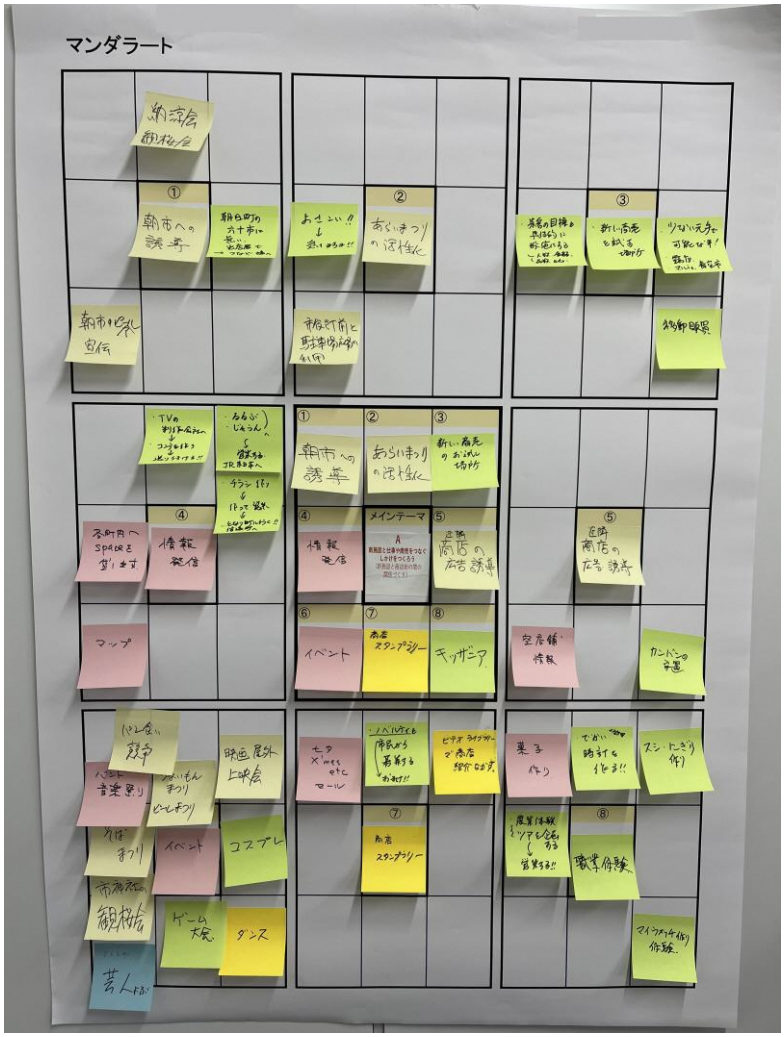
D グループ：世界から人を呼びあつめよう（新施設を活用して、中心市街地に観光客、移住者をひきつける手立て）

E グループ：こんなオープニングイベントをやろう（来年秋の施設オープン時に人びとがあつまるイベントを）

内容は以下のとおり

【A グループ：新施設と仕事や商売をつなぐしかけをつくろう】

＜「マンダラート」に書かれた内容＞

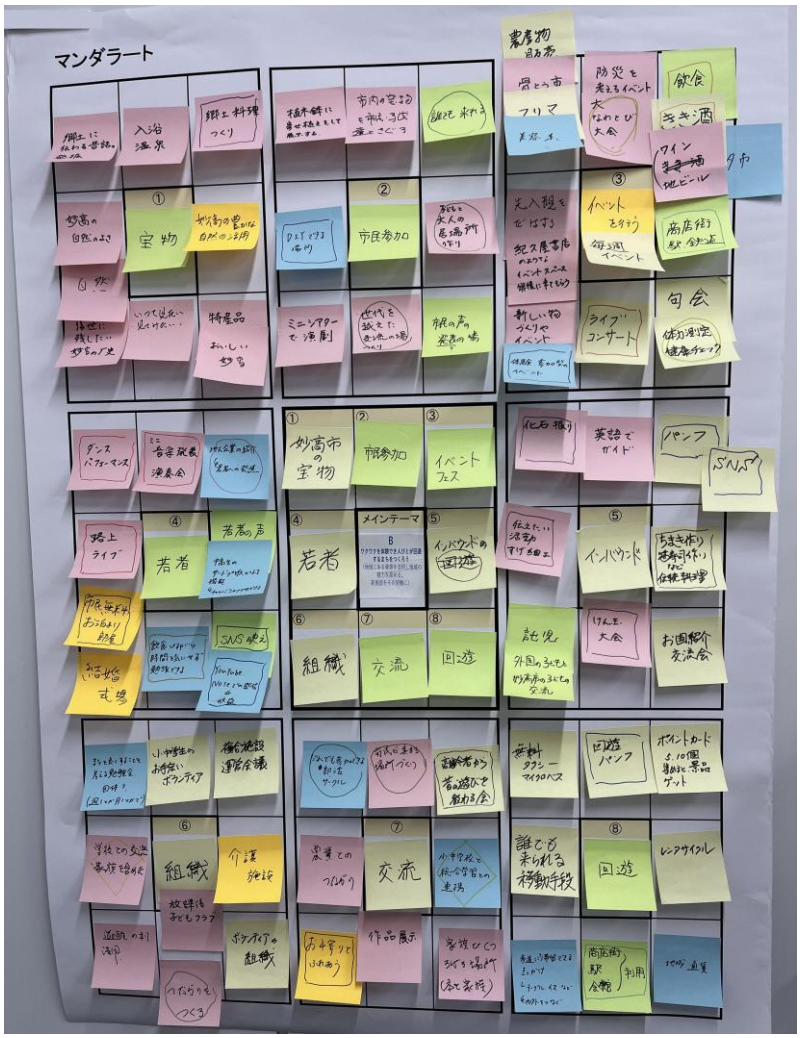


＜サブテーマと発表内容＞

	内容
サブテーマ	**①朝市への誘導　②あらいまつりの活性化　③新しい商売を試す場所　④情報発信　⑤近隣商店の広告誘導　⑥イベント　⑦商店スタンプラリー　⑧職業体験**
発表概要	●一番盛り上がったのが「イベント」。まちじゅうをあげてのパン食い競争、映画の上映会、うまいもんまつり、音楽イベント、そばまつり、コスプレ。そばにある神社での観桜会、吉本の芸人をたくさん呼ぶ、ゲーム大会、ダンスなどの意見が出た。 ●あとは「職業体験」。お菓子づくり、専門の時計屋さんがいるので時計づくり、妙高市は農地も多いので首都圏からお客さんを呼んできて農業体験、おいしいお寿司屋さんも多い、などの意見が出た。

【B グループ：ワクワクを体験でき人びとが回遊するまちをつくろう】

＜「マンダラート」に書かれた内容＞

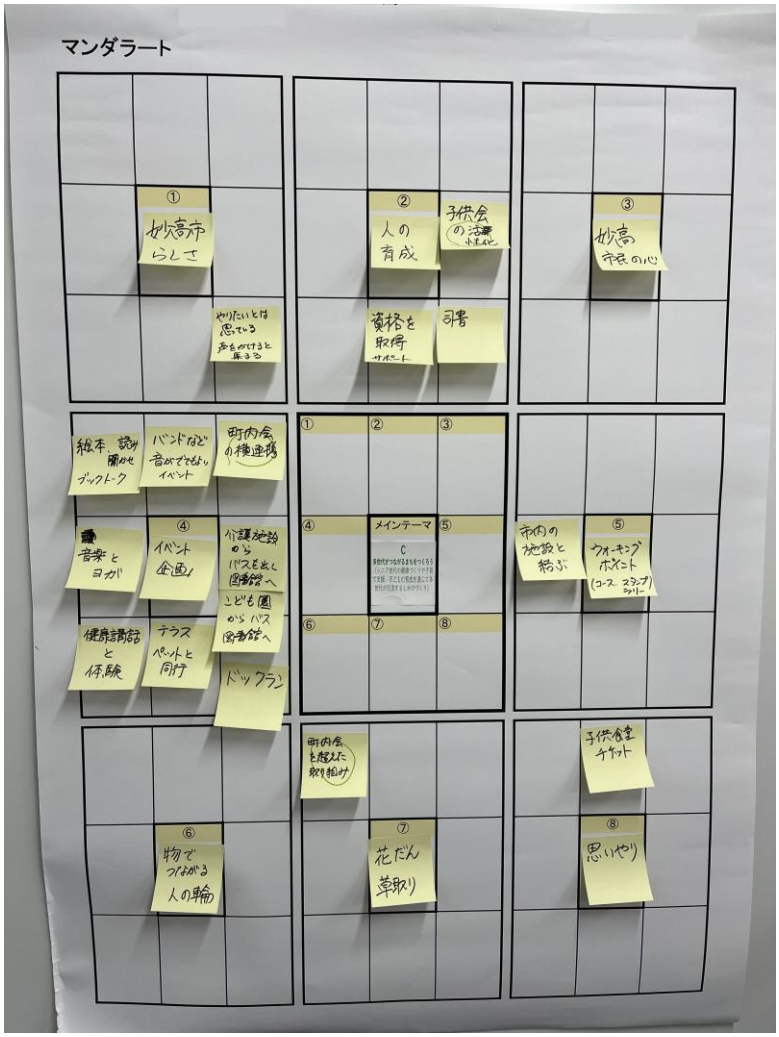


＜サブテーマと発表内容＞

	内容
サブテーマ	**①（妙高市の）宝物　②市民参加　③イベント・フェス　④若者　⑤インバウンド　⑥組織　⑦交流　⑧回遊**
発表概要	●妙高市の「宝物」としては、温泉、自然、歴史、特産品、郷土料理づくりなどが挙げられた。 ●「市民参加」としては、子どもと大人の居場所づくり、ミニシアター、寄せ植え、発表、DIY などの意見が出た。 ●「イベント」については、飲食関係、お酒、ライブやコンサート、体験参加型のイベント、体力測定、健康チェック、ラジオ体操、朝市はあるが若者は来られないので夕市、などの意見が出た。 ●「若者」については、ダンスパフォーマンス、路上ライブ、飲食もできる勉強場所、SNS の活用、中高生のサードプレイス、地元企業の紹介などの意見が出た。

【C グループ：多世代がつながるまちをつくろう】

＜「マンダラート」に書かれた内容＞

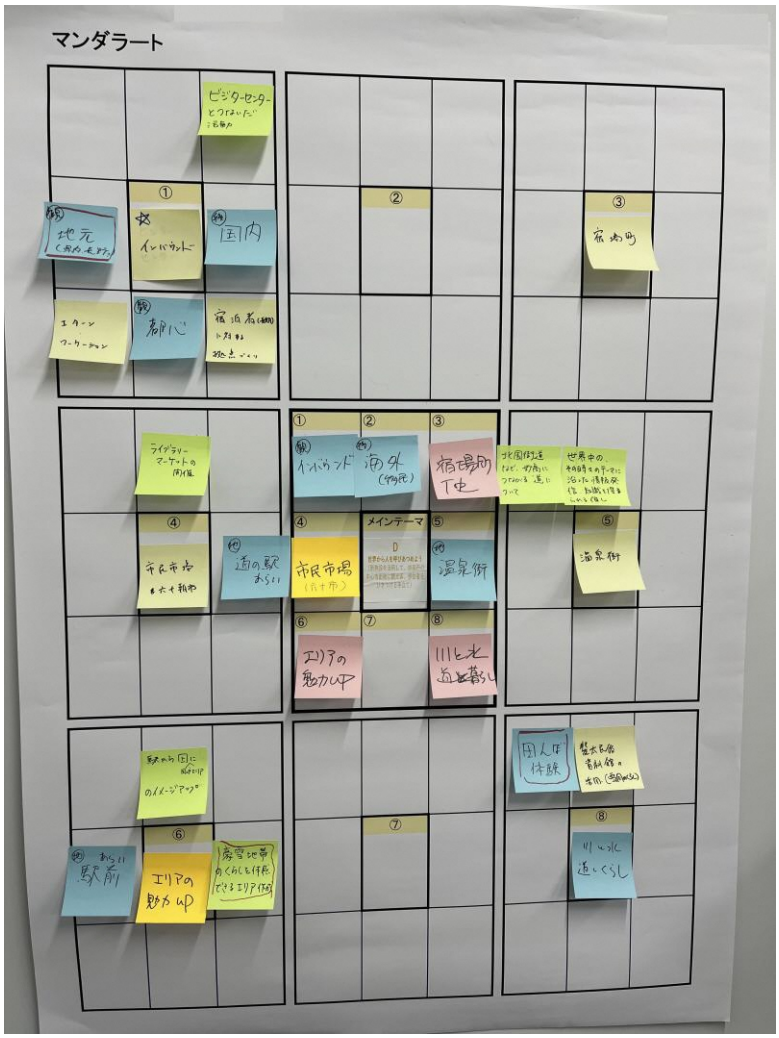


＜サブテーマと発表内容＞

	内容
サブテーマ	**①妙高市らしさ　②人の育成　③妙高市民の心　④イベント企画** **⑤ウォーキングポイント　⑥物でつながる人の輪　⑦花だん　草取り　⑧思いやり**
発表概要	●町内会の取組みなど、横のつながりがない。それを連携して、「花壇」の「草取り」などの活動ができたらいい。子ども会と組み合わせると世代を超えた交流が生まれるのではないか。 ●「妙高市らしさ」については一人ひとりが思うところがある。それをもっと出しあっていけるといい。やりたいがなかなか一歩を踏み出せないのが妙高市民のネガティブなところだが、声をかけると集まる。 ●いろいろな世代がつながるには、「妙高市民の心」を起点に皆さんが集まって話をしていくというところが大事。そういうのが「思いやり」につながるのではないか。 ●あとは「ウォーキング」、健康づくりということで、ポイントを貯めるスタンプラリー。妙高市には図書館以外にもさまざまな施設がある。人が来ないようなところを、どう活性化していくか。図書館がハブとなってさまざまな拠点をつくる。それが新井地域だけではなく、妙高高原、妙高の方にもつながっていけばいい。

【D グループ：世界から人を呼びあつめよう】

＜「マンダラート」に書かれた内容＞

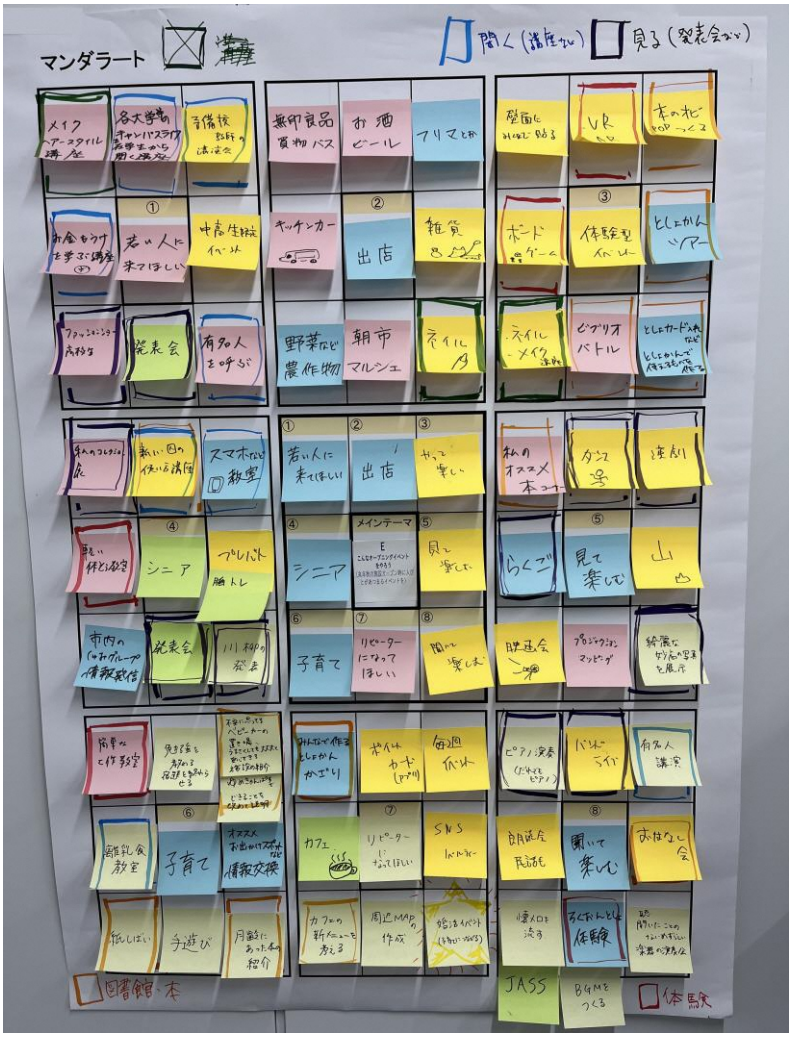


＜サブテーマと発表内容＞

	内容
サブテーマ	**①インバウンド　②海外（移民）　③宿場町　④市民市場（六十朝市）　⑤温泉街　⑥エリアの魅力 UP　⑦なし　⑧川と水　道とくらし**
発表概要	●世界から人を呼ぶということで「インバウンド」に目をつけた。妙高の魅力、「宿場町」の歴史だったり、新設図書館の周辺で、例えばキャンプ型の体験、あえて豪雪の体験ができるみたいなことを打ち出し、集客をする。 ●たくさんの人に来てもらったうえで、「市民市場（六十朝市）」、そういうところで、お金を使ってもらえる流れにしていく。

【E グループ：こんなオープニングイベントをやろう】

＜「マンダラート」に書かれた内容＞



＜サブテーマと発表内容＞

	内容
サブテーマ	**①若者に来てほしい　②出店　③体験型イベント　④シニア　⑤見て楽しむ　⑥子育て　⑦リピーターになってほしい　⑧聞いて楽しむ**
発表概要	●サブテーマには年代別に「若者」「シニア」「子育て世代」がある。 ●聞く講座、見る講座、体験する講座、VR やお金を学ぶ講座、簡単な工作教室など、いろいろな意見が出た。とにかく利用する方が増えてほしい。また、婚活イベントも開催して、子育てにつなげていければいい。

【アドバイザーコメント概要】

- 何かをやろうとするときには「why」から始める。物事を何かやり遂げるのに一番大事なことは動機とか情熱。「なぜ」「なんのために」というところからはじめ、そのあとにやり方・手法、そして具体策・やりたいことをロジックとしてつくっていく。「なぜ」「なんのために」やりたいかをしっかりと説明できるとき、銀行も突拍子もない事業に金を貸してくれる。
- 発表を聞いていると、具体策・やりたいことがすごく出てくる。それを「なぜ」「なんのために」やりたいか。例えば、婚活をやる。いいが、「なぜ」「なんのために」ということがあるからそれがある。
- 紫波町は、市民参加条例がある。この市民は「citizen」。そこで住んでいる人だけでなく、町に通う人、働いている人、町に関わりを持っている人、関係人口を含めて「citizen」という。市民参加条例なので、多くの人の居場所をつくり、孤独にさせないために図書館をつくる。そこに、「なぜ」「なんのために」がある。
- 「なぜ」というものを、もうちょっと考えて、こういうマンダラートをつくると、より深みが出てくる。動機とか情熱を、ぜひ大事にして、よい図書館ができることを、陰ながら応援している。

第４回ワークショップの様子

▲アドバイザーによる講演

▲グループワークのやり方の説明

▲グループディスカッションの様子①

▲グループディスカッションの様子②

▲各グループから「マンダラート」に書いた内容の発表